

超次元
超印心
- Beat Blades Haruka -

ナリカ編



原作◆アリスソフト

著者◆深町薫

挿画◆ベンジャミン

目次

プロローグ . . . 004

第一章 017

第二章 055

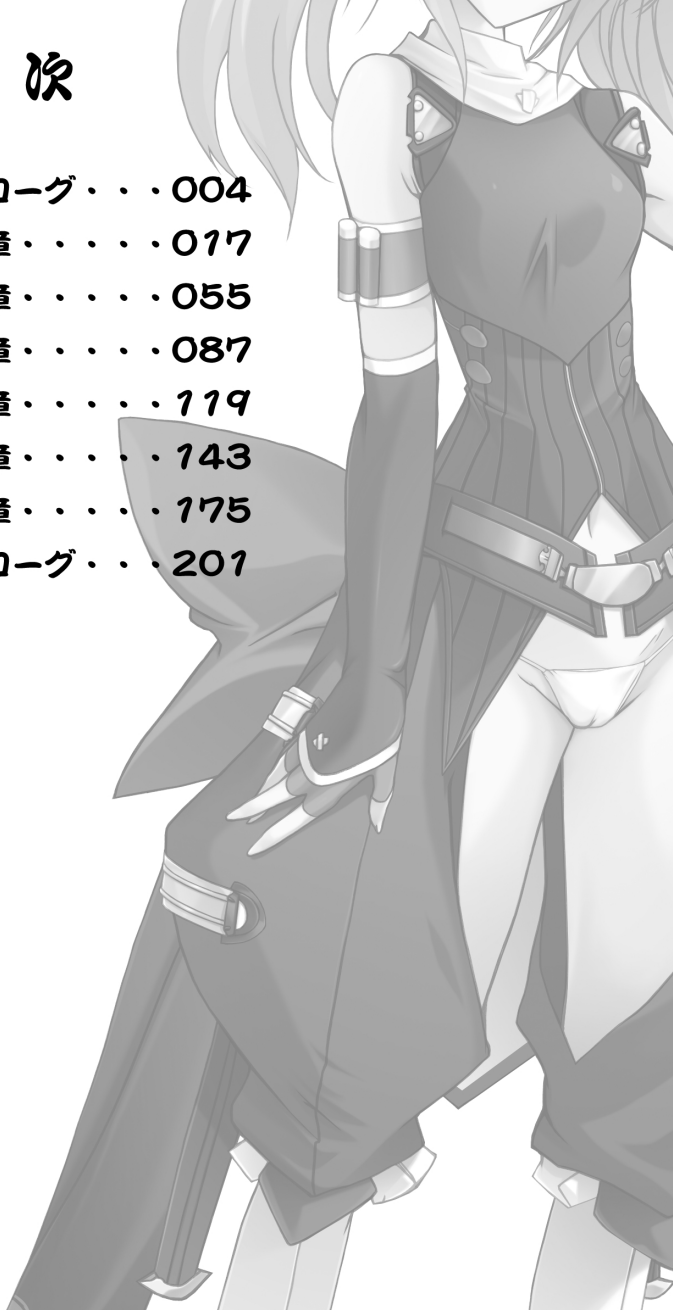
第三章 087

第四章 119

第五章 143

第六章 175

エピローグ . . . 201



プロローグ

四方堂ナリカはアキラの家のキッチンで夕食の準備をしていた。

今日はコロッケとエビフライを揚げ、後はシーザーサラダを作るつもりだ。人数が多いので、たくさん用意する必要がある。

ナリカの料理の腕前を知ると、みんな、意外そうな顔をする。料理が得意であるなんて、彼女のイメージに合わないらしい。

ツインテールの髪のせいで、子供っぽく見えるからかもしれない。体つきも小柄で、スレンダーなため、余計そういう印象を与えてしまうようだ。

ナリカは自分のことを家庭的な女の子だとは思わないが、とにかく、料理を作るのが好きだった。

料理はいろいろ工夫ができて、オリジナリティが出せるし、何よりみんなのおいしそうな顔を見るのがナリカにとってはおうれしかった。

「おい、夕飯、まだ？」

できたての料理の匂いに誘われたのか、戦部鷹丸がキッチンに顔を覗かせた。
「今、作っているところよ」

ナリカは鷹丸がつまみ食いをしないか警戒しながら、そう答えた。

今の状況では、この家できちんとした食事の準備ができるのはナリカくらいだ。それに、彼女がみんなの役に立てることはそれくらいしかない。

閃忍である鷹守ハルカや実行部隊の指揮を執っている黒鉄アキラは、ノロイとの戦いに忙しかった。

たとえ台所に立つ余裕があったとしても、ナリカが思うに、きっとアキラなどは今までほとんど料理をしたことがないに違いない。

その点、以前から、ナリカは父親の清玄が開いていた道場の人たちのために食事の支度をしており、一度にたくさん料理を作るのもお手のものだ。

また、ここに引越す前、鷹丸は清玄の所有するアパートを借りていて、道場にも通っていたので、ナリカが彼の食事を作つてあげること多かつた。

今は、みんな、アキラの家に居候しているが、食事の支度は毎日のことであり、ナリカはこのキッチンにもだいぶ慣れてきていた。

「暇なら、そのサラダを混ぜておいてよ」

ナリカは鷹丸にそう命じた。

ちよっと手つきが危なっかしいが、鷹丸は言われたとおり、ボールの中の野菜を大きな木のフォークでかき回し始めた。

ナリカは油の温度に気をつけて、コロッケを揚げながら、数週間前のことを思い出していた。今考えると、あのころは本当に気楽な毎日だった。

鷹丸もナリカも十宝学園じゅうほうがくえんに通っているが、彼女は鷹丸の恋の邪魔ばかりしていた。あの時はそれがナリカの役目であり、彼の行動を監視する必要があったからだ。

数週間前の放課後、鷹丸は校舎の廊下で鷺宮さぎのみやという名前の女の子と話をしていた。ナリカは廊下の柱の陰からそんな彼の様子を覗いていたのだ。

「ど、どうかな、鷺宮さん？ この間の返事、考えてくれた？」

鷹丸の声には不安もあったが、それ以上に大きな期待が感じられた。もう何人目になるだろうか。懲りもせず、彼は目の前の相手に交際を申し込んだのだ。

「ごめんなさい……」

それが相手の少女の答えだった。

「俺とは付き合えないってこと？」

一瞬のうちに期待が消え失せ、鷹丸の声はがっかりしたような響きを帯びていた。

「うん、ごめんね。戦部君がいい人だっていうことは分かるんだけど……」

「どうして？ 俺のどこがダメなの？」

「だって、戦部君、ベッドの下に、エッチな本を五十冊以上隠しているでしょ」

「えっ？」

「それに、自宅のパソコンには、ネットから落としたエッチな画像が千枚以上保存されているって話だし……」

「うぐうっ……」

「しかも、エッチなゲームも百本以上インストールされているって……」

「があああつ、鷺宮さん、誰からそんな情報を？」

「すぐに否定すればよかったのだが、鷹丸は墓穴を掘るようなことを言ってしまった。

「やっぱり、全部、本当だったんだ……」

「しまった……」

今さら気づいても、もう遅いとナリカは思った。

「それじゃあ、これからも良いお友達でいましょうね」

女の子はそう言うと、鷹丸の前から立ち去った。

「鷺宮さん……」

ナリカは落胆している鷹丸の前に姿を現した。

「あらら、ご愁傷様（しゅうじやうさま）」

「鷺宮さんに俺の恥ずかしい情報を教えたのはおまえだな」

鷹丸はすぐに真相を見抜いたようだった。

「よく分かったわね」

「またおまえか。何ていうことをしてくれたんだ……」

鷹丸が言うように、これまでナリ力は何度も鷹丸の告白をぶち壊してきた。彼がほかの子と付き合うようになったら困るからだ。

ナリ力が横やりを入れなければ、鷺宮さんとの交際もあり得ない話ではない。

「あの子からタカマルのことをきかれたから、本当のことを教えただけよ」

ナリ力はしらしらしくそんなふうに答えた。確かにすべて真実なので、鷹丸は何も言い返せないようだった。

まあ、そういうのはこの年ごろの男の子としては普通のことであり、ナリ力は鷹丸が特別いやらしいとは思わなかった。

別に、ナリ力は鷹丸に意地悪をしていたわけではない。

鷹丸が女の子と付き合うのをことごとく阻止したのは、不用意に『龍の者』の力を発動させないためだった。

その時はまだ鷹丸本人は知らなかったが、彼は想像破上弦衆の若頭領であり、女性に特別なエネルギーを与える力を持っているのだ。

ナリカも少しかわいそうだとは思ったが、上弦衆としての任務をおろそかにすることはできなかった。

実際には、ナリカ自身、はつきり意識してはいなかったが、そこには別の目的もあったかもしれない。彼女の個人的な思いがその行為に影響を及ぼしていたのだ。

廊下で鷹丸と別れた後、保健室に向かうと、ちょうどハルカと顔を合わせた。アキラが学園の保健医をやっているの、ナリカもここにはよく足を運んでいた。

「ナリカさん、こんにちは」

その時、既にハルカは現代にタイムスリップしてきていた。鷹丸はまだハルカのことを異性として意識していなかったが、そうなるのも時間の問題だった。

ナリカもハルカの正体をアキラや父親から聞かされてはいたものの、あのころ、まだ彼女が遠い過去から来た人間であるということを完全に受け入れてはいなかった。

ハルカはごく普通の女の子で、いつもは穏やかな雰囲気を漂わせており、ナリカはハルカが閃忍としてすごい力を持っているなんて信じられなかったのだ。

そして、その数週間後に、邪悪なノロイが現代にやってくるといふことも、当時のナリカの想像を超えていた。

とにかく、今思えば、ハルカがこの時代にやってきてから、少しずつ目に見えない変化が起こっていたのかもしれない。

今では、鷹丸の心はハルカの方に傾きつつある。二人の結びつきは単に『龍の者』と閃忍の関係に収まらないような気がした。

しかし、ほかの女の子の場合とは異なり、ナリカが鷹丸とハルカの間を邪魔することは許されなかった。

もしハルカがこの時代に来なければ、ナリカが閃忍になっていたのだ。実際、彼女は小さい時からその訓練を積んできていた。

だが、今さら運命を変えることはできない。それに、ノロイとの戦いは過酷であり、ナリカは自分がそれに耐えられるとは思えなかった。

「料理ができたから、居間に運んでちょうだい」

「ナリカは人使いが荒いな」

そう文句を言いながらも、鷹丸はたくさんの料理ののった皿を慎重に持って、キッチンから出ていった。

鷹丸はいいかげんな人間に見えることも少くないが、意外にしっかりしているところもあって、ナリカもその点は頼もしく感じていた。

いざという時にはリーダーシップを発揮することもあり、最近、特にそういう場面が増え
てきている。

鷹丸にみんなをまとめる力があるのは確かだった。それは『龍の者』が持つべき指導力な
のかもしれない。

いや、そのような能力は『龍の者』だから備わっているというわけではなく、鷹丸という
人間が本来持っている資質ではないかとナリカには思われた。

鷹丸のそうした魅力には気づいていたが、今まで彼の恋愛を邪魔してきたということもあ
り、ナリカはどうしても鷹丸に対し、素直な態度を取ることができないでいた。

「腹減ったな。飯だ、飯だ」

居間には大きなテーブルがいくつか置かれ、料理が並べられている。既に何人かの者が集
まってきていた。

だが、そこにはナリカの父親や道場の仲間たちの姿は見えなかった。ノロイに連れ去られ
てしまったのだ。

その代わり、今は、実行部隊の実質的な隊長であるアキラや、通信オペレーターのスズモ
リたちと、一緒に暮らしている。

それに加え、上弦衆の里からの増援も到着していた。

しかし、それでナリカの寂しさが弱まるわけではなく、こうした食事の席では、みんなが

集まるため、なおさら父親のいない喪失感を強く受けてしまう。

その場で殺さず、わざわざ清玄たちを連れ去ったのだから、ノロイ党の党首、骸居わくろい炎えん斎さいには何かもくろみがあるのだろう。

清玄や仲間たちは苦しい思いをしているかもしれないが、まだ生きていると信じたい。だから、ナリ力は望みを失わないようにしていたが、時々、その心は大きな寂しさに襲われることがあった。

「ナリ力、どうした？ 大丈夫か？」

気持ち顔に出してしまったのか、鷹丸が心配そうに声をかけた。

「何でもない。ご飯にしましょう」

ハル力の姿は見えなかったが、先に食事を始めることにした。アキラとスズモリもまだ居間に来ていない。

「よし、飯を食うぞ。いただきます」

鷹丸がさっさとテーブルにつき、料理にはしを伸ばそうとした時、ハル力が居間に飛び込んできた。

「タカマル様、ナリ力さん、怪忍かいにんが街に現れました。作戦室に来てください」

「ちえっ、せっかく食おうとしていたところだったのに。ノロイのやつらめ」

鷹丸はそう文句を言いながらも、ハル力やナリ力と一緒に、この家の地下にある作戦室に

向かった。

作戦室はいわば、ノロイと戦う際の司令室だ。中央には大きなモニターがあり、高機能な制御パネルが数多く設置されている。

ここからノロイの動向を監視したり、アキラが戦いの指示を出したりするのだ。

「現れたのは、ルリー・ジョーだ。また人々を操ろうとしている」

作戦室に到着したナリカたちに、アキラが声をかけた。

「今度は決して負けはしません」

ハルカが決意のこもった口調でそう言った。

怪忍というのは邪悪なノロイの力を得て、人間や動物が姿を変えた化け物のことだ。

ルリー・ジョーはもともと人間に捨てられた人形だったようだが、人々を赤い糸で操り、悪事を働かせる力を持っている。

前回、ルリー・ジョーと戦った時、ハルカは負けてしまった。そして、敵から過激な辱めはずかしを受けた。

しかし、同じ目に遭わないように、ハルカはここ何日か厳しい訓練を重ねており、鷹丸やナリカもそれを見守りつつ、応援を続けてきた。

「ハルカさん、頑張ってください」

ナリカの言葉にハルカはうなずき、瞬転しゅんてんの法により、怪忍が出現した場所に転送された。上弦衆は最先端の技術力を持っており、ひそかに様々な機械を発明していた。転送装置もそのうちのひとつだ。

「始まるぞ、戦闘サポート、スタンバイ！」

アキラの声とともに、巨大なモニターに現場の様子が映し出された。

ハルカの閃忍のコスチュームには小型カメラがセットされており、その映像が作戦室に送られてきているのだ。

モニターに映っている怪忍は、人形の少女であるルリーと操り師のジョー、二つの部分から成り立っていた。

『ルリー・ジョー、あなたにもうこれ以上の悪事はさせません』

『あなたの名前はハルカだったかしら。また私の糸で操って、淫らな痴女の役を演じさせてあげるわ』

ハルカと怪忍の言葉がスピーカーから聞こえてきた。

両者の戦いが始まった。ルリー・ジョーは糸を繰り出し、ハルカの体に巻きつけて、その動きを封じようとした。

ハルカはその糸をクナイで切り裂き、ジャンプして攻撃をかわしている。あのスピードなら、ルリー・ジョーに勝てるかもしれないとナリカは思った。

ハルカの持っているクナイは上弦衆が現代の最新技術を用いて、独自に開発したものだ。それに加え、そこには閃忍の特別なパワーも注ぎ込まれている。

「大変です。街の反対側でも、ノロイの反応を感知しました」

リーダーをチェックしていたスズモリがそう報告した。

「別の怪忍か？」

「いえ、ゲニンのようです」

ゲニンはノロイ党の下位の戦闘員だ。

「今までは怪忍もゲニンもまとめて一カ所に現れるだけだったが、とうとう二手に分かれて攻撃してきたか」

そうなると、ハルカがどれだけ強くても、一人では対応しきれなくなる。

「今回は違うが、現れたのが両方とも怪忍ということになると、厄介だな」

アキラの言うとおりだった。そのように攻撃が分散された時、自分たちはどう対処したらいいのだろうか？ ナリカは心配になった。閃忍に変身できるのはハルカしかない。

「今日のところは、実行部隊のうちの何人かを派遣しよう」

上弦衆の忍者なら、閃忍でなくても、ゲニンを倒すくらいのことではできる。だが、怪忍と対等に戦うことができるのは閃忍だけであった。

一方、ハルカはルリー・ジョーの糸で体の自由を奪われることもなく、敵の弱点を狙って

攻撃を仕掛けていた。

ジョーの手とルリーの腕は糸でつながっている。それを断ち切れれば、両者が連携して動くことができなくなるらしい。

ハル力が二本のクナイを同時に投げつけた。それらはルリー・ジョーの両側にある糸を一気に切断した。

すると、ルリーもジョーも手足がだらりと垂れ下がり、そのまま地面に崩れ落ちた。

『ひいいつ、大切な糸が切れたわ。ただの人形に戻ってしまっ……』

『ノロイ様、助けて……』

邪悪なノロイの力を失い、ルリー・ジョーは元の人形に姿を変えて動かなくなった。こうなると、もう人間に害を及ぼすことはない。

ほかの場所で暴れていたゲニンたちも実行部隊の忍者が無事に倒し、街の平和は守られていたようだった。